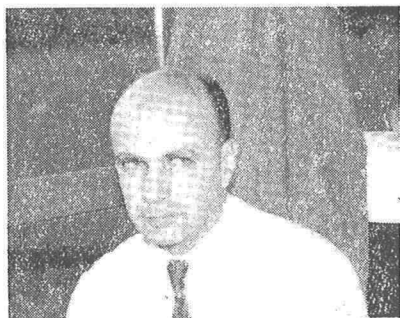


来日数学者の横顔

Richard Brauer.

1901年ドイツ Charlottenburg に生れ、Königsberg 大学講師を経て、1930年代アメリカ大陸に移住。1934~35



年 Princeton の Institute において H. Weyl の下で助手となり、その影響を大いに受けられたようである。ついでカナダの Toronto 大学に移られたが、第二次大戦後 Michigan 大学に転ざられ、現在 Harvard 大学教授。

研究分野は代数学、殊に多元数論、群論に優れた業績が多い。始め I. Schur の研究を受けついで多元環の表現論を組み立て、多元体の構造等を研究された。次いで1935年有限群のモジュラー表現の研究に着手して以来、その日覚しい発展を成し遂げられた。又、モジュラー表現論自身の発展のみならず、有限群の構造の研究、有限群の既約表現に関する I. Schur の予想の解決、Artin の L 関数が有理型であることの証明等、モジュラー表現論の応用に関する研究も多く、現在有限群論に関する第一人者である。

氏は、われわれの質問に対していつも親切に答えられ座談中にもいろいろと気を使われる温厚地味な紳士ではあるが、又、'アメリカでは有望な若い人で結婚後思つた程のびない人の多いのは、妻の発言力の大きすぎるためではなからうか'等と批判される一面も持たれている。なお音楽好きで、日本の民謡に興味を持たれたらしく、レコード等買入れられたようである。(関野 薫)

Max Deuring.

いかにも古典的の大学教授といった堂々たる風貌であるが、一面、麦酒を愛し登山を愛するドイツ紳士である。'かん'がまことによくわれわれが半分いいかけると、残りを自分でいつて 'yes' とうなずいているといった調子。それはいくらか早合点もあるかも知れないが、それよりはむしろ彼の持前の親切心と見るべきだ



ろう。親切で礼儀正しいというのが一般的な印象である。1907年 Göttingen に生れ、現 Göttingen 大学教授。研究分野は多元環、代数的整数論、代数函数論等にわたり、Ergebnisse 叢書に、Algebren の著書がある。Hasse の仕事を受けついで代数函数体を研究、特に楕円函数体を精細に研究して古典的虚数乗法論を完全に代数化した。また、虚数乗法を有する種数1の代数曲線の Hasse と函数が Hecke 量指標の L 函数で表わされることを示したが、今回の、symposium における彼の講演は、この結果をさらに精密にしたものである。Weil は現在、楕円函数の虚数乗法に最も精通しているのは Deuring であるといっている。(志村五郎)

André Néron.

素直で温和な人柄、だがそのものやわらかな外顔のかげに情熱がかくされている。どつしりと、しかも緊つた体格だが、体の線がやわらかなので、威圧をうけない。パリの郊外に愛妻および二児とすみ、メトロでソルボンヌに通つた。学生の頃は類体論を勉強していたのだそうだが、その後代数幾何学に替つた。Algebraic variety 上の整数論を独特の方法で研究し、その方法を Picard variety の理論に応用している。現 Poitiers 大学助教授。



しかし心はいつも整数論を慕つているのだそうで、最近の手紙にも '居合わす人々が齊しく arithmétique について語るのを聞いていると、代数幾何へ向つて滑べりのよい坂みちに身をゆだねた今でも、もう一度それと取り組みたい気持が起つてくる。'とあつた。(久賀道郎)

K. G. Ramanathan.

私がはじめてインドの Ramanathan 君に会つたのは、1950年、私が Princeton 高級研究所へ着いてしばらくしてからであつた。

Ramanathan 君は、同所の permanent member であつた Siegel 先生について研究中であつたが、研究所はもう3年目とのことで、外国から来ている連中のなかでは一番の古顔であり、始めて来た外国の学者は全部同君に何かと世話になつたものである。

Princeton 高級研究所へ外国から呼ばれて来ている人たちは、一宅名の知られた学者ばかりであつたが、まだ30にならなかつた Ramanathan 君が、わざわざインド

からよばれていたのは、同君が如何に秀才であつたかを示しよう。

また、同研究所に続けて3年もとどまるということも異例であつて Weyl 先生、Siegel 先生は、いずれも同君の実力を非常に高く評価しておられた。Weyl 先生は、私が同研究所に滞在中、19 世紀の数学史についての講義をされたが、その講義のための助手をつとめたのは、Ramanathan 君であつた。



Prof. や Dr. ばかりの同研究所の所員の中で、Ramanathan 君はただ一人の Mr. であつたが、しばらくして同君は Princeton 大学の方から Ph. D. の学位を得られた。

こうして、3 年間の研究生活を Princeton で送つた Ramanathan 君は、インドの Bombay にある Tata Institute of Fundamental Research の Staff の一人として迎えられ、今ではその有力なメンバーの一人である。

同君の話によると、インドは、数学の面では、まだまだ古い殻を脱していないそうである。研究の方面はもちろんであるが、インドの若い数学者の養成のためにも、今後の同君の大きな活躍が期待されるわけである。

(矢野健太郎)

Jean-Pierre Serre.

1926 年南フランスに生れ、1948 年 Ecole Normale を卒業した新鋭である。現在フランス東北部の Nancy 大学助教授であるが、Paris に在住し、1 週 1 回通つているという。

業績は各方面にわたつているが、特に Eilenberg らの始めた homological algebra の方法を一貫して各方面に応用し、球面の homotopy 群を決定し、また faisceau の理論を整理して faisceau analytique, または algébrique の理論やその代数幾何への応用など、著るしいものである。Séminaire H. Cartan にも重要なメンバーで、そのプリントには、Serre 教授の手が少なからず入つている由である。これらの業績により、1954

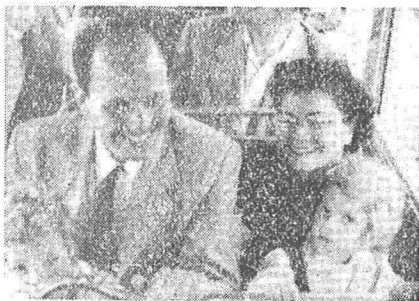
年、Amsterdam における Congress の折に、わが小平邦彦教授と共に、Field 賞を受けられた。

Serre 教授は大変気安い青年で、8 月 26 日琵琶湖周遊の折なども、ほとんど数学の議論ですごしたし、日光でも、夜おそく Weil 教授と一緒にたすねて来て議論して行つたりされた。ピンポン好きは有名で、別府では、国体の選手を負かしたと伝えられている。(一松 信)



Daniel Zelinsky.

1922 年生れ。Chicago 大学卒業。Northwestern 大学の Associate Professor。去る 9 月上旬夫人および 2 人の可愛らしい子供さん連れで来日。Symposium 終了後も、1955 度 Fulbright 研究員として、引きつづき京都大学へとどまり、本年(1956)5 月ごろまで講義や seminar 等をされて、若い人々と一しよに研究される予定。



またその間各地を旅行の予定。専門は、homological algebra, 環論, 位相環等。1955 年秋の京都での学会講演(非可換 Galois 理論)は次号に掲載される筈。温厚な学究的な人。御夫妻とも日本の文化、風俗等にもなかなか関心が深く、片言ながら日本語も勉強中とか。

(河田敬義)

来日数学者と接触して

今度の symposium を機に来日した数学者と、symposium を通して接触し得る人の数は自ずから限りがあるので、新数学家集団(略称 S.S.S.)では、座談会、討論会、ピヤパーティーなどの形で、その人達と、若い研究

者、学生との接触の機会を作つた。然しこれらの会に出席できた人も、在京の有志に限られたわけであるから、以上の趣旨を徹底させるために、ここにその一端を御紹介したい。